

街談文々集要

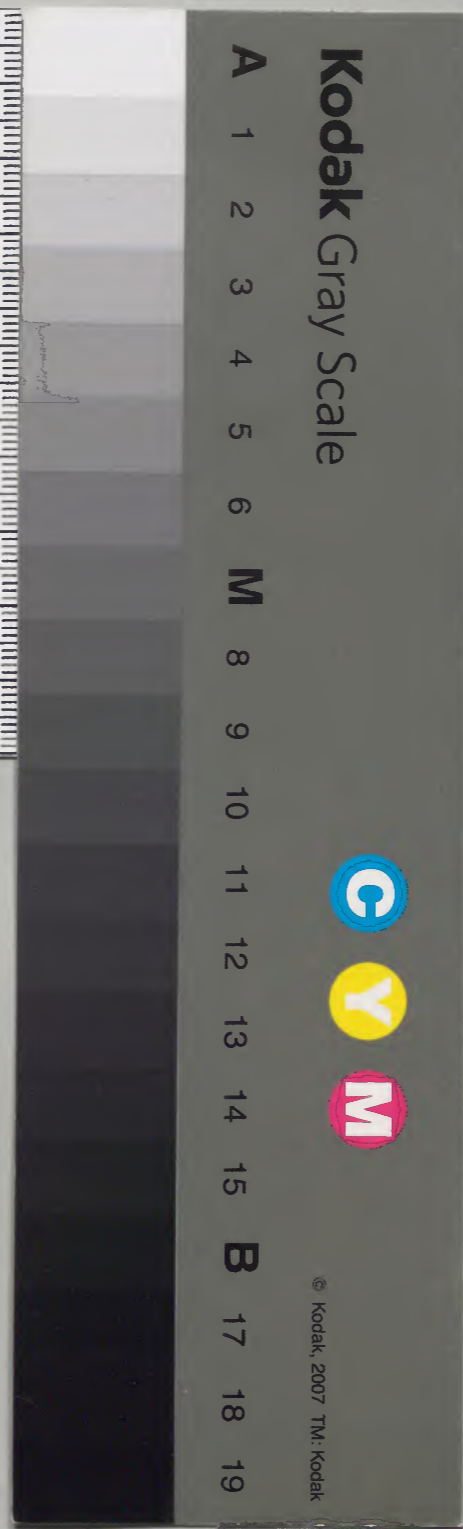
十五

				和書門類
一	七	八	二	
八	架	函	號	

内閣文庫			
三	七	八	和書類
函	架	冊	
六	八	二	
架	冊	號	

(五十一)

内閣文庫	
番號	和 27982
冊數	18 ( 15 )
函號	211 104



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり  
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

強 樹

文々集要

重々下

あは中乞

街

談文

集要下之卷  
文化十二乙亥

明治十三年

東京府立

圖書館

豐原子戲編

中

春

河麻之種類

中

秋

吟味歌回春

中

冬

鏡持中追放

中

以

根犯之落字

中

五

似物化同合

中

六

小宮慶通卷

中

七

御用子誕生

中

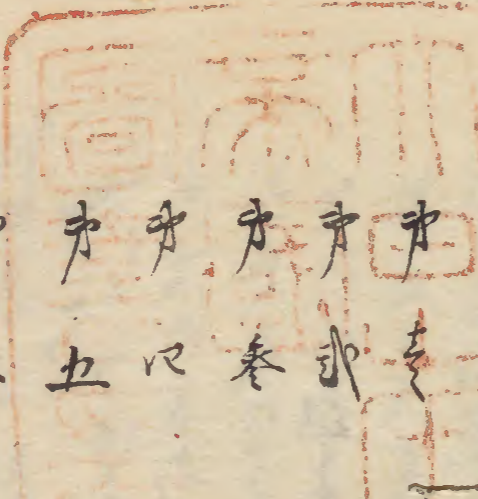
八

編流馬具行

中

九

南御設印愛



才十 予青泥濁就  
 才土 其為不流夫  
 才三 朝魚之奇怪  
 才三 市松漆起原  
 才十四 水者妓回卷

水と下のそそ

才ま 河原之種類

一 文化十二年五月十五日所記於中村口市ありあり  
 左に老河原市より教十之鯛をとりアツカ（ハ）の乳也其  
 撥白く大き形糸一才の分位する種を斜めくよ深山  
 谷川お生をるのゆき京都を指すの也  
 鳴多麻のとも琴之味縁苗村の村のゆきつひしあくわ  
 馬大名方出あくさみり此名あるり  
 右門十市ありあり鯛子をとうせ鯛方区はは十三年位すき  
 山

河蝦考 文政辛酉印本源真撰著  
 序文記の出入本庄太平 廣田屋彦彦書

- 鯛魚之種類
- 鰻魚・黄鰻魚・及々・鱸魚・鯛魚・沙魚
- 及々蜂・及々魚蜂・スナホリ・タボハセ・ゴリ・ゴロウ
- 蝦蟇之種類

・蟾蜍<sup>シキカハル</sup>・青蝦蟇<sup>アヲ</sup>・赤カハル<sup>シキカハル</sup>・蛙<sup>ツチ</sup>・蛙<sup>ツチ</sup>・河蝦<sup>カハル</sup>  
 ・肌蝦蟇<sup>イハカハル</sup>・カハル蝦蟇<sup>カハル</sup>・山カハル<sup>ヤマカハル</sup>・コカハル<sup>コカハル</sup>・クワカハル<sup>クワカハル</sup>  
 ・カハルカハル

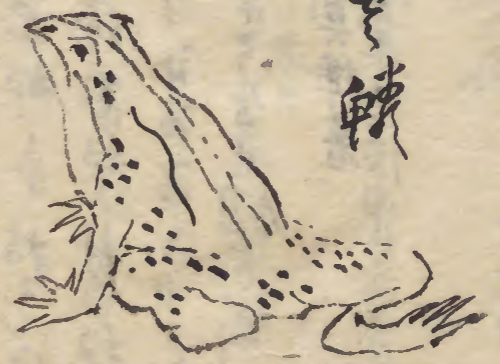
雲蟾

秋河蝦  
俗云

カハル  
カハル



冬蟾



春蛙

田野<sup>ノノ</sup>ニ住<sup>ス</sup>テ  
十ヶルモノ



黒蝦蟇  
俗云カハル  
月良男  
茶溪寫

市<sup>チ</sup>族<sup>ゾク</sup>父<sup>フ</sup>見<sup>ミ</sup>見<sup>ミ</sup>  
ヒク

鯽<sup>ニ</sup>イレ  
イレ

俗云カハル

蚪

俗云カハルコ  
又才玉抄子



文廬

葉<sup>ハ</sup>蟾



赤蝦蟇

アカカハル



蟾蜍

俗云ベツカフヒキ

波羅密



指先が如く  
アハル

黄桑魚ギウ

史羅舉



蛙  
アハル

史羅舉



蟾蜍

俗云  
ヒキカハル

五岳老人画

豊後馬

いぬる又依え存此秋むらゝの國嶺山より申八條之ちり  
 ける附の春河と云はるやとせりた而る原海にタツとの  
 甲信守りさるるのき妙ありてよの五哲一キ一ツ  
 なるる折糸をわらうの物人とわりおの喜ゆり  
 よりてかまのりりるのたぞとひきまかちちり  
 春がさしつぐをよみ重くさつたてはひきま  
 下さるり相ととあのは合と後も強ありけき  
 さつたてはひきまのよみおの如き物も足るま  
 其の生れに怪師者えとがうよめを連取河  
 冒周の蛙の記とよめいかにる鯉ありとよめ  
 波の人のいさく様もかちる二種魚の鯉おの  
 釣く様もよめいさくありて取七は美妙なる  
 其のよめうらげく交の末かゆり秋の形ち蛙の如  
 免悪ちひさくといさくを好いれもよめおの  
 女常より居のまのむらゝのおたま河がたつとく



ぬれりよんくかうの美ありと云出たりと云  
事いあはれ五岳魚工にせ字さやをぬ文改るの七り  
豊茶云

ひらき移又のこさきしと清りし時  
保我野に里に九清ありはありと川あり  
形も沙真のとも春小斑ゆ又未去毛  
かうと春よ千秋大さ箱のわ箱も  
若びびくありとむも千味ひとせのほ  
ぬまのゆる地ありと尋しと  
と中は物さうぬほまも中名のよめ  
このあはれさうぐんしとせとあ書ス  
ま細いあはれとせりとも  
取く

秋のふりすむ  
ふよ  
昌月  
昭和八年の十月

阪昌周河蝦親 荒木田久老河蝦親 西井塘雨河鹿親  
先生の老話と又るべし

文化十二 吟味 歌問答

一文化十二 文あり十の可  
あやうし中田郡を海の中下谷を色あ  
沙治まき夜中の半夜銀ひりり  
村又系 扶問すまは 小中田実情を  
状は或日中村が不捲回すまも  
このいんが中村の勤物と  
既く知る人ありと多めると  
送春あさお油藏老の道一男子  
船とあらは連うし白州せよ又  
陳謝せよ何と歌  
冬く昔今和歌原福を  
形将人の指とともしうたき  
森のち州

中村氏言りお道  
折りて根を切りしは朽果し露と紙其表乃り糸  
とありはまゝと井田又冬多き時此の折り止す  
と多し手後之類は折後切りし未初より折時語り  
追放し候



中三 鎧持中追放

日二月

史蹟  
左田藤平  
鎧持中問  
吉

千言儀他先千弁史蹟ありて如きの儀世に紙書福  
趣平火事傷出役人同中へ後て幕へ役人共中付る  
此の由ありし上折外振田山門外上折彈正大御方あり  
此より家主人儀の福也(其)右折後振平人教一同相  
居山和西丸吉山性吉川能存吉山山納戸折後友三市出吉  
山多し系也(其)家長屋橋居の吉山山馬勢吉山山人教  
此折後混雜しゆき方流折の山山此折吉山山長山山山山  
此折の方(側)山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
石山折後流折山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山





本外乃... 也状字...

庚申

八月七日

大村...

言... 氏身... 仕業... 名目... 年為...

廿六 小倉...

同日... 振多...

于方家...

中肯... 家老... 婦...

御法會... 出定...

右... 右田...

八月十日

月十日... 濱達...

小笠原... 用...

庚七 御男子誕生

一月十五日御男子誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。  
二月十五日御男子誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。  
三月二十日午刻御誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。  
海門院殿。御誕生。御誕生。

庚八 鑄流馬興行

東照宮御所。御誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。  
寺所。御誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。

御誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。

庚九 南御役邸裏

文化十二癸亥十月九日。御誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。  
御誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。  
一月廿八日。御誕生。御誕生は、御後御子孫の方、土月御子孫也。

十月 千壽催酒戦

文化十二年十月廿七日午前中座の悪悪なるもの隠毛  
切知多酒合戦とあり多妙酒を

是の慶安本中ありし地を坊坊依大徳元座源と酒戦なり  
古訓不陸小真りせしり

我文漏席の之秋於書しつたり多千羽狩なりされども  
後しつり多を多り多るん

今日中六隠毛入口の門不陸を至り多言 抱一前  
不許悪容 下座入庵門 多言多り

全宴不漆を志せしもの上人事多ありの位た心我と承りぬ  
より切多と多源し信島の座安と通多そよ酒戦の柱  
徳也

予看

大盃 木具臺

カラス 瓶  
ササ梅

又 臺

海膽 乾焼多

吸物 鯉角才小口切

見物所の青竹と摺毛鯉浦者

屠龍公子 齋齋先生 文魁仙翁 千不結名子

酌人 妓四人

三升共合集

信濃系と申共  
香慶老人

世美席巻一書 通司通務系堂 休一眠 一 均考し合

四升余

大長

辺り割れ餅を並ねてお附以違下酒とて一升五分合  
かきお申 兩替人 錦の道行しとて

五升五合入 三杯餅 書を置置

掃物 百市

積りかきし三つをききき 翌日 叔母の多とのあり  
足舞あしし 因縁妻の次は 舞束の牡丹餅を競務者の中し

口糸 松部

和江の島の形七合入 分澤家の五を五合入のり飲

會所の益を五合入のり飲まより 舞束の餅を五合入  
入のり飲まより 舞束の餅を五合入のり飲まより  
園を舞ひし 友来ん子事 八月 止飲 益  
強人 一賀 新甫 鯉隱居 日上三人  
小山前 松部

地縁毛龜の益体くろそ

吉多神の丁七申  
大徳老人

数重の上あり 舞束の餅 一升五合入のり飲まより  
通司通務系可あり 控女と申 控女

山太

南のあはれをいふと先はわりのけ 後多也 東田 舞束乃  
家いしう 庭をいふと先はわりのけ 後多也 東田 舞束乃  
舞束とて 舞束の餅を五合入のり飲まより  
止る口 舞束の餅を五合入のり飲まより  
やあしあ 舞束の餅を五合入のり飲まより  
舞束の餅を五合入のり飲まより

馬鹿をやる  
天小

あつとあつと一皆一碎れさる自分碎る言ふ所

酒を升 醬油を升 大門 長治

水を升 酢を升 右に酒を三味線や一拍子とさく飲  
る言所 氏三

砂升五合余 先住 軒共

右月以 終日お持〜〜お盆教初代  
いく女

あんなに江戸のあま合へ豫念七合入を揚つてのこ小盆を教  
あらびきと終日砂人なり  
馬鹿を 更代女

も升五合 碎人のお抱を〜〜さ月と碎〜孔を那

取升五合 孫毛慈の盆やうなるの〜りも き〜や す〜女

と合 豫念の盆や〜吞違申方外遊障のあち付息 傳五

あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所  
碎る色なり〜砂人若くは我なり

あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所  
あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所

あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所  
あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所

あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所  
あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所

あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所  
あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所

あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所  
あつとあつとあつとあつと 碎れさる自分碎る言ふ所

東江にぞく河内東江の縁人糸波殿の古くより  
おびあふはるは尤も強名河内御守に奉りて通し  
度舟

奥列合伴

河内山系

一  
一の勝五合入より始に孫五合入宮高を井入り奉り  
申し置を井井入縁を急二歩五合入丹頂の杯を  
ぞりり止りてを懸く懸け申し二軒と申し  
一盃とすむ河内中程に要用也申し申し申し  
申し置はあふん一決置ぎ是は形も申し置  
一程を述く語意之より置形申し置し  
申し置集合申し一の強酒りり

幸路水

佐々藩

長中年

石市

吉市

頼雲

おれ殺を申し置

吉市を申し置

石市を申し置

一  
一 幸路水  
一 右河内  
一 幸路水  
一 右河内  
一 七合系

文基書各

平族

東作

かゝり酒合神地好き月出後酒  
慶永二年此例酒林先生法定の御酒  
あふ酒一也一也子作千石

南極箱印抄

千求己堂

當日酒量勝負附

才一番	三升八合	吊指さき久内旅人	上流屋専太郎
才二	三升五	本々お弓町	比 丸左門
才三	三升二	友玄横山町	井上喜十郎
才四	三升一	千住宿	依成金満堂
才五	三升	浅草馬道	指物を文右三つ
才六	二升七合	吉原町女藝者	花立のせ
才七	二升六	深川木場	俳人右登富喜
才八	二升五	瀬戸物町	むさし金藏
才九	二升	神田才助	松本 東菴
才十	二升	板橋指	石和文左門
才十一	一升七合	麹町平川	髮詣由 麻
才十二	一升五	芝罎月町	尾川祇娘 十五
才十三	一升四	日本橋吳服町	和泉田 豊八
才十四	一升三	大傳馬町	越崎 巳之助
才十五	一升一	向嶋白粉前	米吉 十

右十五番と六行司の令々側おりて一々住居姓名  
 をあつて甲乙と分てり其餘の酒客八皆一升とを  
 限りす故不住居姓名と記す然れども此連十を  
 もて數ふべし

酒戰會世話人

千住宿 政木長左  
 浅草 菊池清七  
 花川戸 村本幸三郎



江島杯  
七合入  
鎌倉杯  
一合入  
宮島杯

下野  
月  
千佳  
藤人

同司同司同司  
月 月 月 月 月 月

同司同司同司  
月 月 月 月 月 月

千佳  
吉字  
月 月 月 月 月 月

芝嶺  
芝嶺  
芝嶺  
芝嶺  
芝嶺  
芝嶺

仁煙  
大張  
吉  
吉  
吉  
吉

方理料  
持取  
持取  
持取  
持取  
持取

鳥寶壽  
大化十二年十月廿一日  
從安女創於中  
蝶々先生  
竹箱東子  
平扶東作  
溜林先生  
物鵬齋先生  
其升名家  
諸君子子  
見  
大化十二年十月廿一日  
從安女創於中  
蝶々先生  
竹箱東子  
平扶東作  
溜林先生  
物鵬齋先生  
其升名家  
諸君子子

丹頂鶴杯  
三合入  
綠色龜杯  
五合入  
萬善壽

立石  
吉原  
馬倉  
津敷

同司同司同司  
月 月 月 月 月 月

同司同司同司  
月 月 月 月 月 月

千佳  
吉字  
月 月 月 月 月 月

謝  
謝  
謝  
謝  
謝  
謝

松  
松  
松  
松  
松  
松

上竹  
玉  
綠  
酒  
銘

中六隱居  
中六隱居  
中六隱居  
中六隱居  
中六隱居  
中六隱居

新書畫展觀會

五月廿五日不拘晴雨  
於千壽驛源長寺

東都首名諸先生詩歌連誄掛幅 凡三百幅

千壽酒戰錄并高陽鬪飲畫譜

當日諸先生席上揮毫

千壽驛

催主 頌酒堂鯉隱居謹白

中六

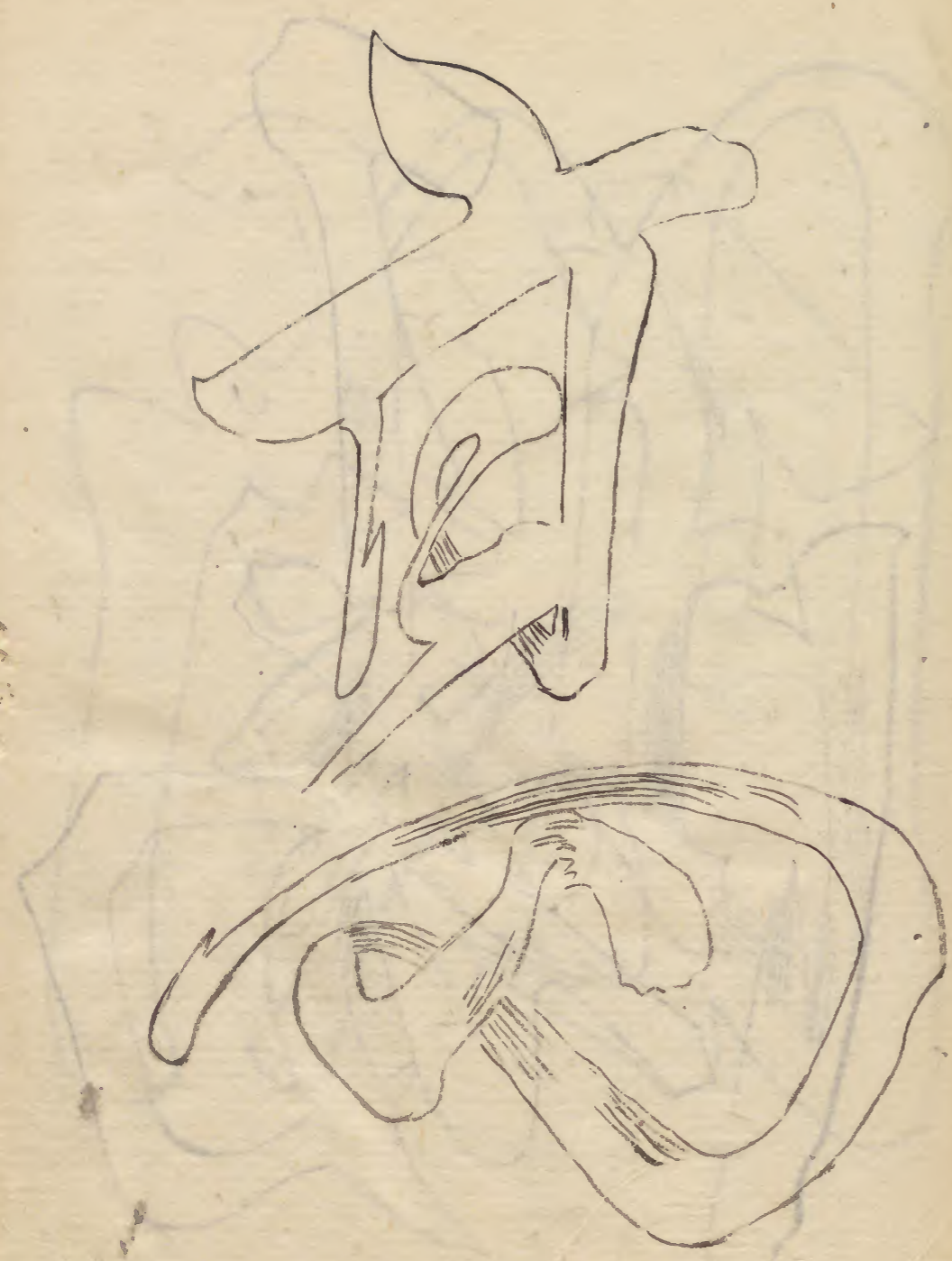
補

鯉興

助 燕市

秋香菴

當日名家所藏之古書函等轉借致一備展觀  
清先生書函少規々此方八地名姓字少記一後  
のり當日八混雜傳故追るのり一上  
當日所藏之書畫又八以自筆之書函可子裝  
畫に在るもの持来のり一以  
鯉隱居再白



5-3-23

草書「海」

草書「海」

高陽酬飲序

千壽驛中二亭主人今茲年六十於是開初度之壽為

闌飲之會乃先期發招單大集都下田間之飲客如

狂花

俗言沒良多智上戶

歡場客馬

俗言利久津上戶

之類則緊斷之下吉

之日相會者凡一百餘人皆一時之海量也各々左右分隊相

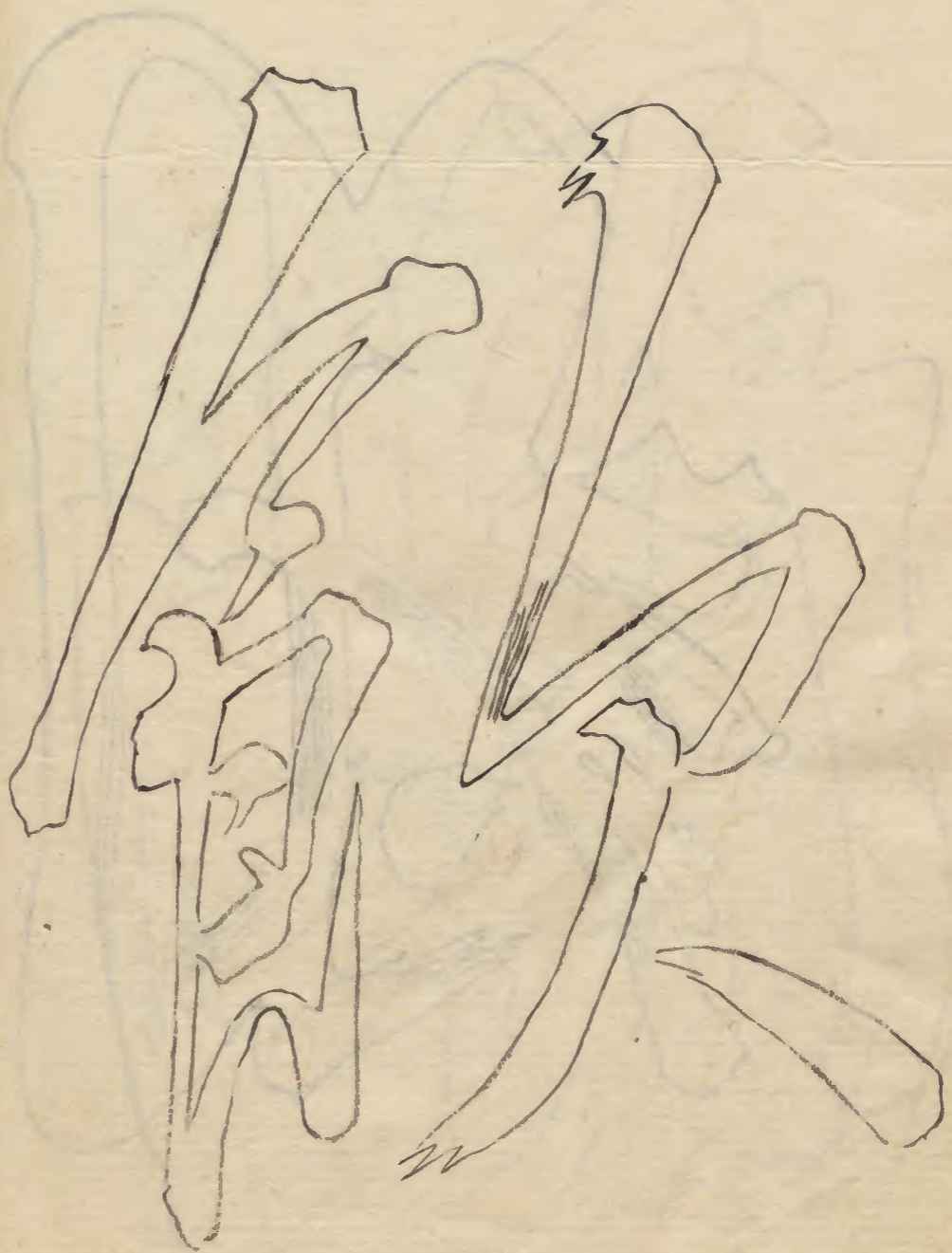
坐每方一人升席左右二人相對而舉白焉乃立觴政置

錄事而替之嬌女三人侍其側而給仕焉皆柳橋之名

妓也一人捧盃而進舍其前二人各執注子左右注之其

酒則所謂玉綠即伊丹之上釀其美則鯉魚即綾瀨

之新鮮鱗也者校雜陳種々不一其盃則描金雕鏤



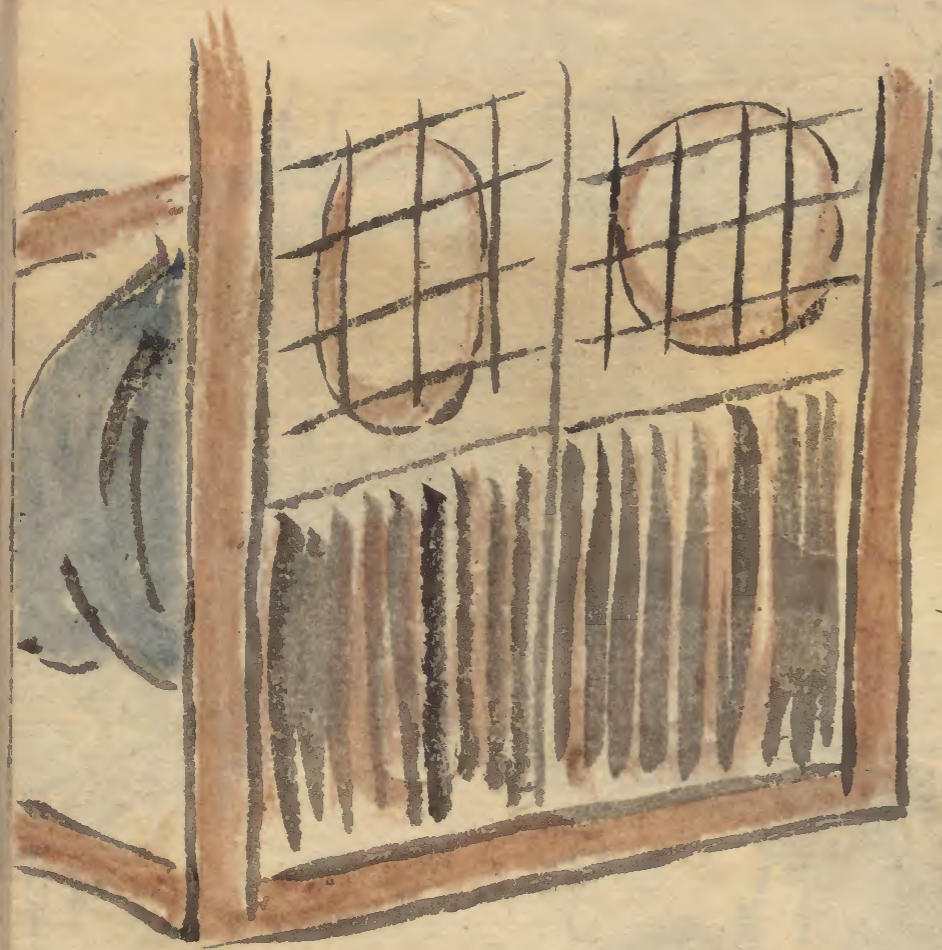
實帝世之珍也自五升而登之或七升或一斗或一斗二升  
受三斗為至大而已或有一口吸盡者或有數口而竭之  
者大小之筭盡以傾其筭者是為第一名焉其餘則  
次之為差各々簿錄以課甲乙輸贏其筭不滿斗者  
不在此數也各々雙手捧盃引滿盡飲不餘一滴實如長  
鯨吸百川矣觀者皆吐舌坐客喝采不已至飲畢眾莫有  
多言喧嘩皆致禮辭謝而歸余亦酒人也雖然吾自知其  
量之不敵退逃其隊在傍而觀之乃歎云古人謂酒有別  
腸者如今日之人者邪宋張安道劉潛石曼卿日夜對  
飲而不別輸贏明王漸自下道士鬪飲而定甲乙水蓮道  
人輯酒顛無懷山人著酒史以述其事為太平之盛事不亦宜  
乎嗚呼至人壽已六十而有祝此太平之盛事則至人之先其  
有天之羨祿者乎時文化十二年歲舍乙亥冬十月廿一日

關東

鳴齋老人興  
禪龍父撰

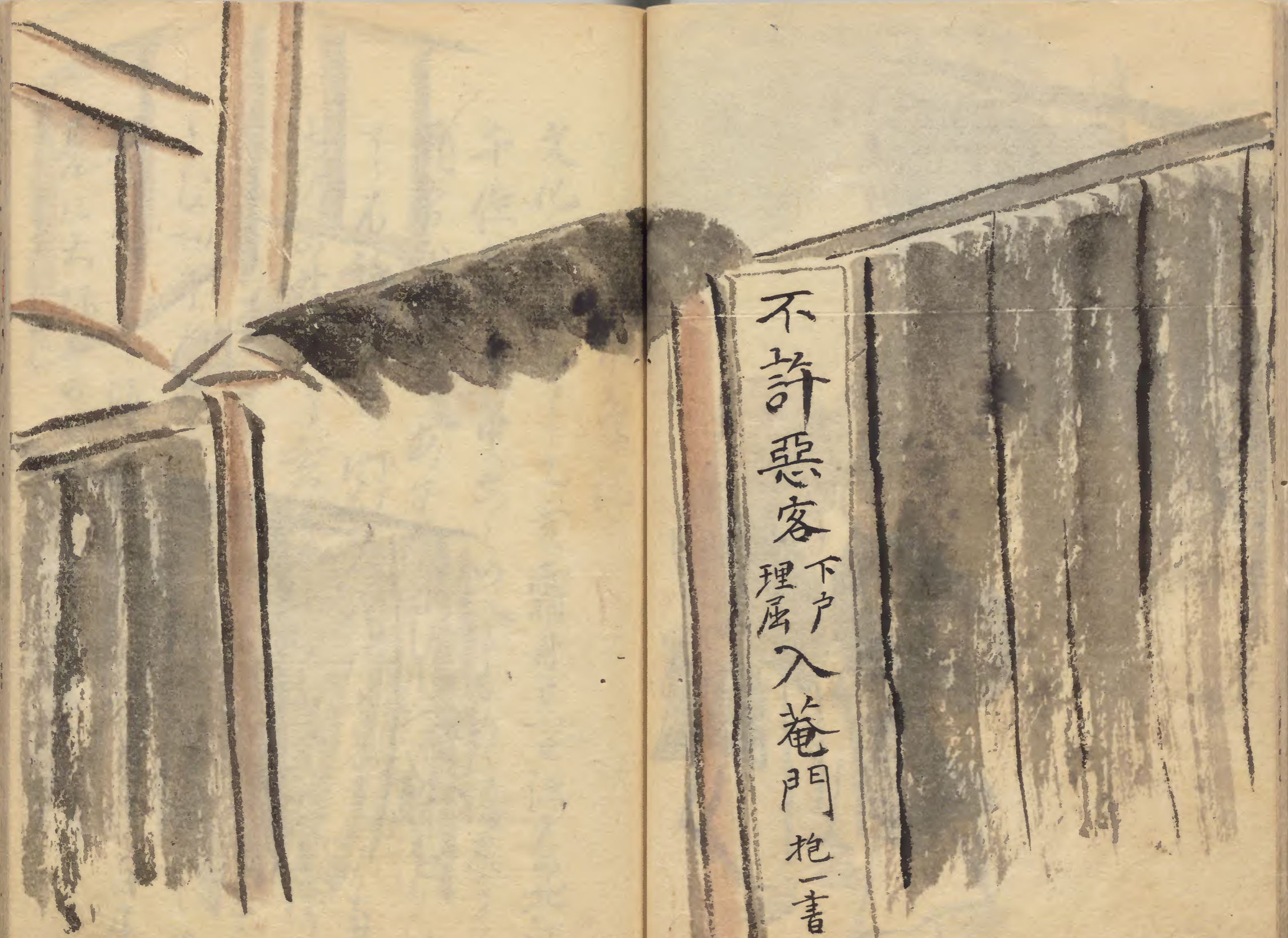


Faint, vertical Japanese text is visible on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are difficult to decipher due to their lightness and the texture of the paper. Some legible fragments include characters such as 山 (mountain), 水 (water), and 舟 (boat), which are consistent with the landscape theme of the adjacent page.









不許惡客

下戸  
理屈

入菴門抱一書

後水記

文化十二のとき乙亥霜月廿一日江戸の北郊  
千住のほやう中らとくもの伝説ま  
酒者銭のあま門まびらの聯をりけ  
了る祥思あや野ア唐門と志るせう南い  
老人のまきふり玄深まらへきあまは稽き  
たるものあま身まきまのよをのこれ酒景を  
とむ切半をわさしはあよらし  
あまし酒銭此席よつらむ白はの  
基に大杯をのせりあまそのさつらきハ



江島杯 五合入

深倉杯 七合入

多島杯 一升入

糸青子壺 一升  
五合入

緑気龜杯

二升  
五合入

丹頂鶴杯

二升  
入

をのゝその盃は給あるへー

干骨ハ巻よかりみこ花塩さきし梅等あり

まじりころの巻は解きし麩の焼きをまれり

羹の鯉のきりめ印きんしその子をそへ

くしん杯をこゝ賓者の席ハ紅襪をーき

青竹をとり曳をあらへりしゆ屠龍云

文晁勝杯の二先はその外名家の諸君はあま

いしめ四人酌さる酒を以て玄慶といふ

杯よまじり十二よりと名酒三升五合あまりの

ほしやんまきり通郭所の紅葉の堂にひ

くむ一睡しつ家れえれも大長ときとえい

ハ四味あゆりを花しちりきやうり解り

うらふさる次の新居の母をうり起きて又

ひやう一升五合をかむむけて醒をとときあ

のつらみつれし家よかつしあむ  
掃部宿よあめる農夫市を糸ハ一升五合も  
れもさうよ糸糸を各疆の杯をみつたうも  
てのさうの者よあ焼る蕃椒みつたのさう義  
つらめし叔母あるさの葉しつらつら  
手ゆまうしにんしう猶きる牡丹餅し  
そのを団指葉よさうさうめし  
うしあれも田し道し糸ひさく松葉とい  
ふははあれ杯さうのさうめし  
さうの杯を糸糸を各疆の杯よ  
しつらつらも解あれさうりきなるし日大  
長や酒量をさうさうの角力の具さ  
占身をあさむしはぬ年葉月の再存ま  
てあつらあさめ置るさうさうの人ハ一升  
甫能隠居の二人あり小山さうさうの佐  
糸糸ときこえしハ二升五合りしし録毛  
の杯さうさうさうさう北のさう中  
の所よあさる大徳老人ハ蓋の敷つらう後つ  
みよ糸糸を各疆の杯をさうさうの夜ハ少塚  
糸糸さうさう鬼俤をさうさうあさむし

浅草みくす所の正太とつびりハ此倉に熟ん  
とて梅田を何しこれのともく一升五合を研  
雷神のつちまきくまりくをその妻おじし  
袖ひきくそぶめくをいふくそくむびくれそ  
の色のおれ使おのそとよえはくもの身ふ  
とめくまぬのものをかへせくあくる日  
正太の住に身りくきのよのくく多武  
あくをかへく一升を杯のそまきくとまむ  
石布ときくえくハ茶茶杯をのそほく  
く酔心地のちき舞のくよをくくひまひ  
くもいさめくくまきちつそ次と名くくをの  
こハ酒一升配一升お茶一升水一升をさ  
くせくのひきたあせをのくくむけおせ  
くも魚ありかの肝を給にせくといひく  
くくくられハ飯をく杯漬とくやりおまの  
まをくよやくうくくくく所の茂くを  
録名亀をくくおける住くくくく齋與とい  
くくく同く一盤をくたむけ終りおをく  
あくく中盤の敷うきくく天五とく  
るこれハ五人くくくく海のくくかきき

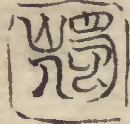
ふん我れう〜をの程ひ〜志あり  
う〜いめわ〜お又ハひもよと酌〜  
豫念のふ〜酒の〜をその外女〜  
了陽春の美代世若春の意を〜酔人をた  
さけゆ〜うか〜酔るりあ〜菊の花  
み〜縁先〜の〜あ〜  
あ〜の〜あ〜酔ふ〜  
酒をの〜い〜その量一杯も〜  
た〜い〜文魁 鵬 齊 二先生ハ〜  
江島 豫念の意を傾けハ 盃めめ〜  
を〜ゆ〜層を〜竹 興を〜送ら  
ん〜を〜今日の 世 此〜  
騎ま〜の 鏡をうちぬき び〜  
〜は 駒 夫の〜あ〜  
〜を〜 酔ふ〜興〜  
酒味の〜をつ〜あ〜  
〜の〜 終 丹 頂 鶴 意を傾〜  
〜一 蓮 意を〜 杯 盤 已 狼  
藉〜門の外 面に 葉 心〜  
〜心〜 宿 人 河 田 何〜

をきく一旅のつよあをきくあび推業  
せししよあふもち席子のそとに  
くうりえしめるあまあをつく  
銀毛の龜まて五盃をのしほ  
の盃のつたさるをあげ有あつ  
くきもをけしこれをとむかの人の  
かきお用あつて明日ハ出たす  
及もれあられあまの用あつた  
さるものをしつ礼しゆぬ人を  
をこの日あきよのそと酒量をかき

ハ二世平秩系化ありしむ  
大陣河京池とを命を悪つ  
協よあめる地茨場持次と  
よの上戸をしきくし酒の  
しめ大居目被古佛の  
るもの化しえんことを  
まいた大居目礼古佛  
野としよことを出  
物よせしときか



をさしよとさきまめうあき酒のともしう日  
志ろくしとて乳み及らんまじ禮義をうし  
ふはさりしそ上代もあうくく一末代も  
又まれあふくしされ會全中六としんる  
しゆの六十の壽がをいしひくかゆ者代  
のよふふ乳をふせしよあんかの迄春はは時  
身子院にみき裾りし一託をともるに其選  
子應ひさるしよのうた八人満中砥酹し  
親居静ふらんあふ六つあゆ子僵卧し  
あるハ殿上にあふしとぬいこのつきちして  
うつたしれさるものハ春系侍彫一人あし  
駿馬をとほりうす貴せられしとあふれれ  
延れ美しうしとされハ草野の奇蹟也  
介や馬を河川のあふきつきせん流波山の  
茂きみつけをあふしむさ一のひろきうめ  
くしハ迄春のひしまの御代もともあまき  
うぬへきりしよのつ巻をいししきう  
も

六十七卷 蜀山人  
綱林橋上たしと壽  




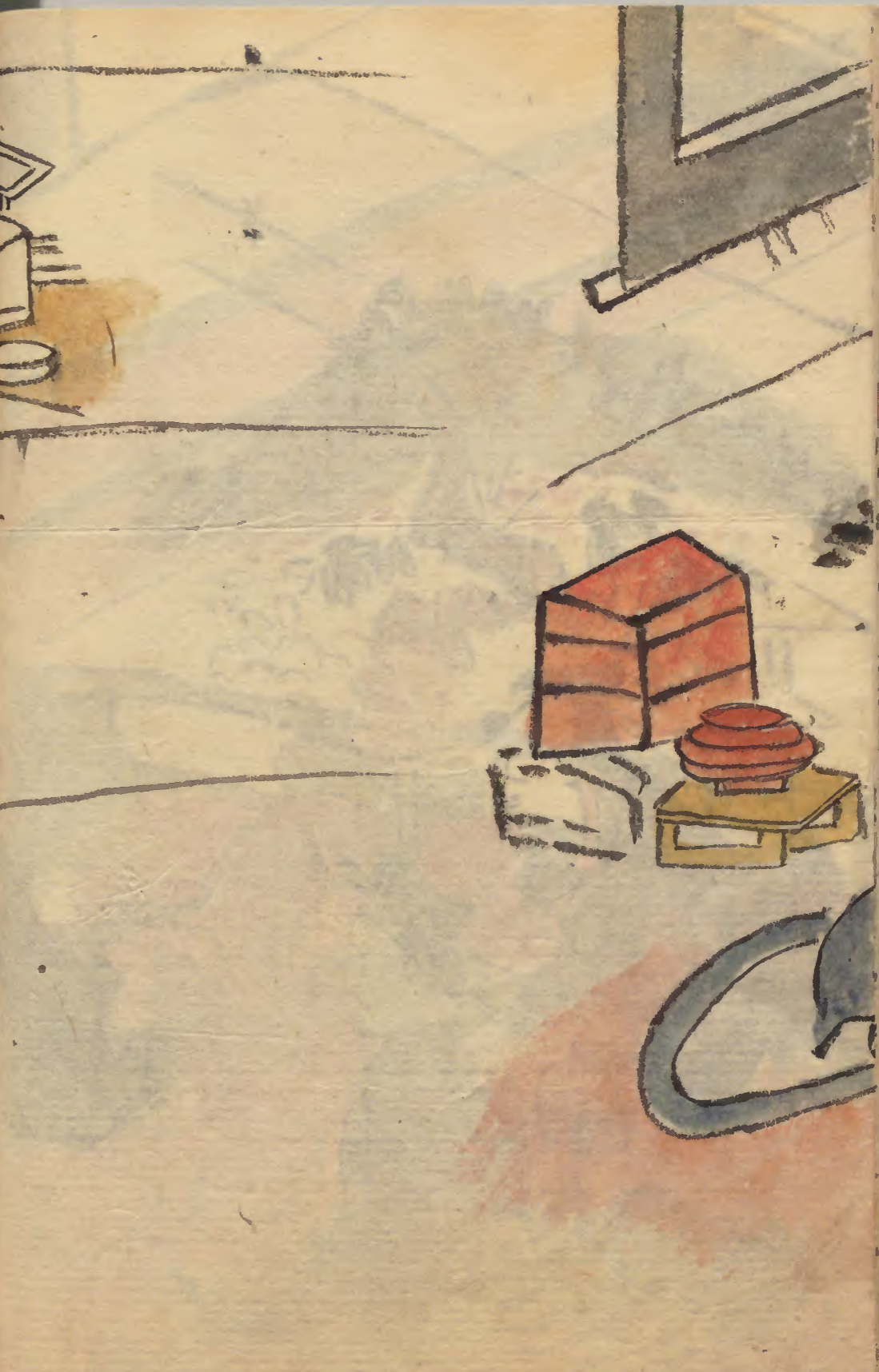
今月同長計。大...  
 今月同長計。大...  
 今月同長計。大...  
 今月同長計。大...  
 今月同長計。大...  
 今月同長計。大...  
 今月同長計。大...  
 今月同長計。大...  
 今月同長計。大...  
 今月同長計。大...

































源戰場中馳逐兵東西排列各第名  
如後酒如海飲似亦之橫海鯨  
子一事慘於解鄉見戰辛駕奮杯  
鷗約滿料來龍俱將以海軍有所向  
定  
淺天之子慈母生身我之古愛  
新邱名  
同其苦

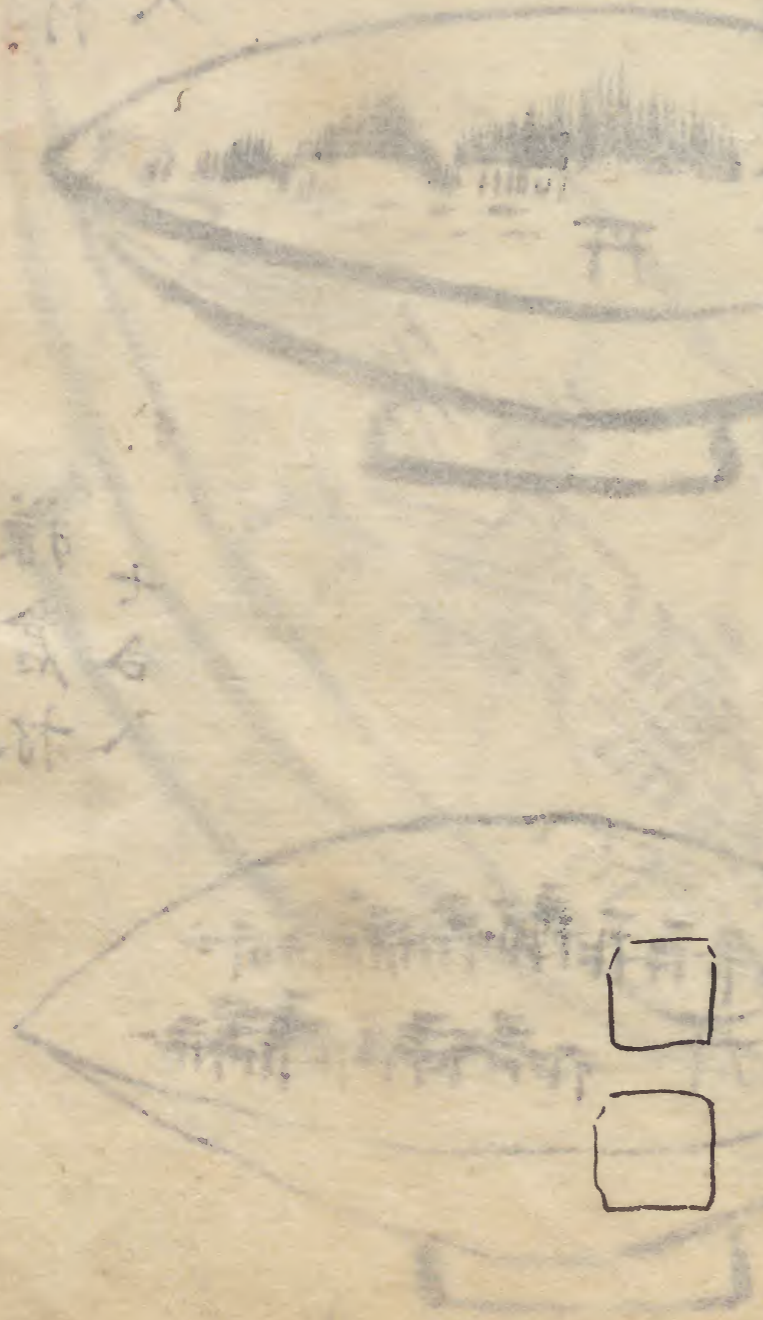
源戰場圖

詩佛先人古家外

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

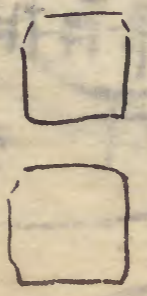
去年春在濟陽屬子居家劉景筠江  
 其國華飲皆能飲其酒為不能飲吾酒  
 因冲其說乃云昔醇釀而頭痛矣試味其  
 所齋紹興酒者甚淡而帶酸飲至數十  
 盃始能而漸紅王因是飲之八傳歌中  
 盃已上飲至五斗者亦甚易之已須千位中  
 六院店以酒哉是皆氣後尾南亦醉字記  
 之勝多酒人序之求矣如案十戶未復何云  
 唯化子序之有字飲之而返之嗚呼仗此酒  
 云尚彼十系在為千倉酒上財其能示醉  
 信而得者亦僅三人也已

乙亥嘉平月寬高寧題明年六十七

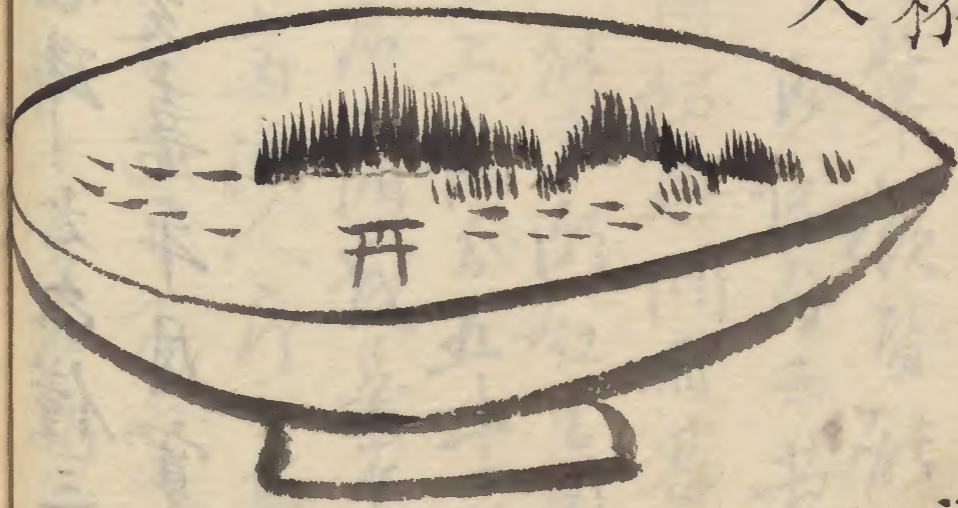


五合八

五合八



江島杯  
五合入



鎌倉杯  
七合入

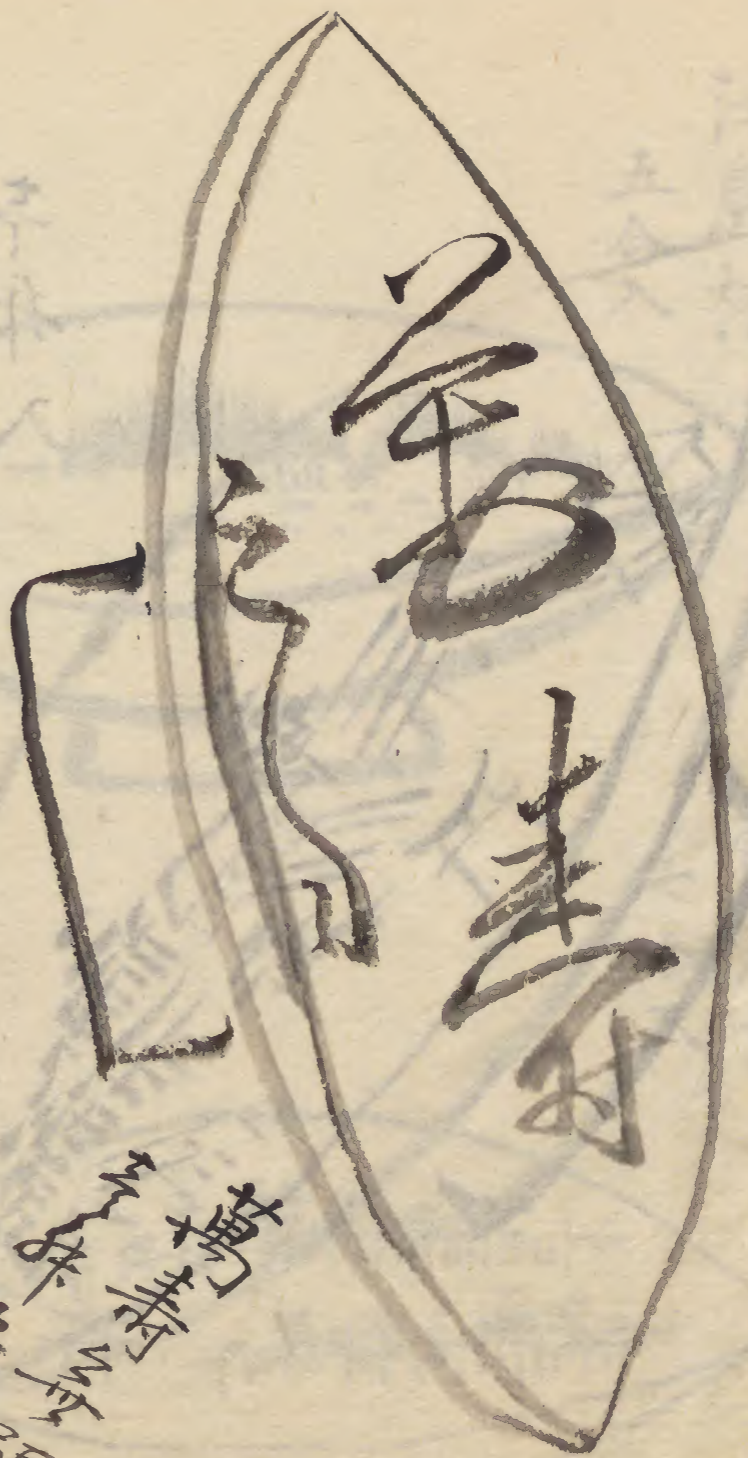


三島杯  
七合入





丹頂西鶴杯  
三斗入



萬曆甲午  
蘇州  
蘇州  
蘇州

緑毛龜杯  
二升 卷八



弘化四丁未年八月十九日

越智直澄



此畫是平賀仙舟所繪  
和歌集  
平賀仙舟所繪  
清江先生  
青島先生

摩訶酒佛陀羅尼

索羅伍難呼師伍日裏

都祇遊幾毛薩騫我

那度連婆陀馱納度

呼喇鄔



文晁□

波瞿哩牟耶喇吒仔鉢鳩薩騫遠衲摩涅婆

陀鉢納此度豫△象△與△與△豫△野那  
鵬齋居士興膜并寫

松の尾の神比本地を

みろく佛ちんをよの

ろくろく 蜀山人

摩訶酒佛者月氏國造釀家之所奉祀也其經者即釋尊

之所述曰佛說摩訶酒佛妙樂經 本邦造釀家宜配松尼

明神而奉祀之因謹奉寫其像以布施海內豪飲之後庶幾俱

受妙樂之福焉

江戸千壽驛頌酒堂主人鯉隱謹識

千壽中六今茲年六十自初度之筵大會都  
下飲士皆一時海龍也各一飲一斗或有傾四五斗  
者可謂太平之感事矣古人以醉人為  
太平之瑞宜哉余在其坐而親觀之時

文化十二年乙亥冬十月廿一日也

海龍君羊飲似爭珠  
雙手擎來傾五湖  
不是伯倫七賢侶  
定應李白八仙徒

太平醉民 鵬齋







かの地質坊指次と

けいせいの河のつてふ

慶安二年のふりてん

こゝに干毒のつてり  
中六甲

六十の里に河戦と

ゆゑにせしと  
きて

蜀山人

よりいひ乃やうきとていふ

との名を卦うくの

酒よしそらめ

『水多礼』下の事

十四 連々乃其其とこゆたかといすも  
井根たりぐおと一其夏

すむたきううつりかか根人々を百一勝をせん乃其めやまを  
かかきあひののふんはよこれや我ちあふくとえさあん  
あんとせましくいひのをぢをさしうとあまかたまもか  
うとぞんがと一其其いふくきを我あはくたりける  
そとあふひの一其るのりもて其いさやさあをこにあらんてあせ  
くもぞ其ををせがらるるも初まきいけあつると中て一勝  
ものこぞすまあつやせんうのあひける大居目其古佛  
のたるどりのまあえん乃其たみに其のたるやなまをたむを  
あししあつていふておれはあつたのうけあふいけあつて  
のあつると其も其あつて其のあつてあつても其あつてあつて  
其あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
其あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

よやち世集うと評定しけりまはらうのぢらうと云  
地乃大どやぞんごうく乃せりあひとの中せどもやうも  
をれへたこちうひきりあにやうと云くさいぢく後集し  
てあせん大勢をせんさうのりれだしけりこそふ力を  
あてて入るをくしにちかせんといふ多うくしむらう  
上流とやあつたあひのころも大さうと云やあも  
のていふれども自らけしむべき時流なきと大勢の中  
けり入るはまきと大なるあちまきと云うまふあん  
おのとうこあありえとをあらうけりうるちれ多うつ  
あわれさる風風の影くけりまきまきまきまきまき  
びるはらうきまきりまきりまきりまきりまきりまきり  
むやうまきまき七勢あつたをめりて今こふまことあらにま  
んしたまきまきしにけりまきりまきりまきりまきりまきり  
むよけりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり

一乃ハ歌ハ是々名カヨリモありえ。ひりけり急いゆりとあら  
そむ味方の声をばへり只持させぬと中れれどは井折へ  
やともやあつたまきりまきりまきりまきりまきりまきり  
才子一人あひの若き時あつたまきりまきりまきりまきり  
此時よりあつたまきりまきりまきりまきりまきりまきり

池上小まある大まきりまきりまきりまきりまきりまきり

此處もあはの酒蔵いけ持次座深の古剣ありて其命をりぬる

「近世奇跡考」云 東京傳記 慶長の次治大塚地黃崎持次と云ふ

宮名次本春朔 系族侍医より 若者の大酒蔵酒蔵門人あつたまきり又狂  
歌をよみぬ 池上小まある大まきりまきりまきりまきり  
西三 不動の像をききまきり右 酒徳院醉翁梅枕居士ト云ふ  
辞世二首あり

よけ人のたをわかれ死出の山打越えれだたきりまきり  
南世にありまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり





商人光船し事海をり○は格物元仁實保強たは彼  
日にお勤延物実故湯灰以候し心は高時を急加めて  
候、撫門、是中られ申すは若くは若くは其の従来七多たの  
出利の獲紗の合相と違え申外ありて盗質入候と書候  
又一人、此の身を合多の暇おられ速書及しよき

廿三

朝魚之奇怪

湯島も代所ふ是田沼八年と云ふは其時方し此方  
と申す人ありけし人のとて娘名をせしとては其時方し  
昔のちまきと申すなりしとてありては其時方し  
其時方し日暮計と申す歌の才子と云ふて去年  
十月のちまきと申すのちまきと云ふては其時方し  
よふこのちまきと云ふ

いふれんあふ候しとては其時方し

まんのとては其時方し

そをいれ娘凡のちまきと云ふつひかたのなくを  
其時方しとては其時方しとては其時方し  
今一月日をたれとては其時方し  
娘の目此とては其時方し  
つふ是の候りては其時方し

ついでとてんや母就かやとて馬の世に形まゝとてあつたを  
 たうやうなれを庭へまきとて娘の心をもたせんとて  
 ちいさなる時へ種と蒔て種々あるを成るがせし物や  
 一いつくもあもわく茎もわたりて花もさくらがりばれを  
 いろ形も花のさぬやせんともいふくせしをもささふ  
 候もとてあある日ほは常の東殿山の内善徳にお母をり  
 ひさ時とてわたりりるが夏のうもふ娘のあつたおろくさる  
 花がさぬまゝといふとてあぬあつたりといふく  
 彩り初のをさへゆきとてあか一人長あがりといふ  
 あゝきふそのつまは涙のうもあつたりといふく  
 時とてあつたりきふとてあは涙を流さるるあつたり  
 まやあつたりきふとてあは涙を流さるるあつたり





市松染起原

南無の坊衣の物故、存冬の紙を仰りて、女の帯はこれ  
くわも成迄、江戸條世上一流、流沙も此を多し、このも  
や、市松染と云ふ事、初めの歳子、女房、坊世川、万箇、小  
老の、子、依の、市松、と云ふもの、寛保元年、幸ひ、去中村、印、を  
知り、よ、成、方、大、洋、判、り、延享元年、甲子、七、上、字、の、あり、同、年  
冬、再、り

延享二年洋判記、より、成、形、に、於、市、村、上、上、吉、同、依、野、川、市、松

〔註〕おさな、地、時、より、と、吉、の、あ、波、法、の、あ、り、ま、今、お、い、た、あ、り、あ、る、の、  
立、物、り、と、あ、り、し、む、い、と、い、の、子、世、に、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格

〔註〕おさな、地、時、より、と、吉、の、あ、波、法、の、あ、り、ま、今、お、い、た、あ、り、あ、る、の、  
立、物、り、と、あ、り、し、む、い、と、い、の、子、世、に、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格  
〔註〕おさな、地、時、より、と、吉、の、あ、波、法、の、あ、り、ま、今、お、い、た、あ、り、あ、る、の、  
立、物、り、と、あ、り、し、む、い、と、い、の、子、世、に、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格

延享二年  
太中村  
羽衣  
清水冠者

延享元年、甲子、二月、日、壽、字、物、後、為、小、吉、服、店、も、あ、り、是、ら、安、喜、の  
引、れ、せ、り、中、界、叔、夫、人、の、流、を、元、文、以、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格  
同、年、去、市、村、産、物、唐、壽、帶、成、と、も、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格

市松染も、と、あ、り、し、む、い、と、い、の、子、世、に、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格  
依、野、川、市、松、は、是、れ、物、賣、り、出、立、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格  
の、俵、形、の、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格  
江戸、染、物、は、と、い、ふ、義、隆、の、粉、色、の、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格  
〔註〕おさな、地、時、より、と、吉、の、あ、波、法、の、あ、り、ま、今、お、い、た、あ、り、あ、る、の、  
立、物、り、と、あ、り、し、む、い、と、い、の、子、世、に、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格

延享二年  
太中村  
羽衣  
清水冠者

〔註〕おさな、地、時、より、と、吉、の、あ、波、法、の、あ、り、ま、今、お、い、た、あ、り、あ、る、の、  
立、物、り、と、あ、り、し、む、い、と、い、の、子、世、に、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格

〔註〕おさな、地、時、より、と、吉、の、あ、波、法、の、あ、り、ま、今、お、い、た、あ、り、あ、る、の、  
立、物、り、と、あ、り、し、む、い、と、い、の、子、世、に、あ、り、ま、あ、り、及、此、流、を、格



芝居三家業種

高野山より北尾重政業

其中小普を所とすの川市まき平下の油見世のあり  
盛身好く後尾介招くゆきのけしき音ひ小尾と相助る名は  
そを  
折登りのありのありとてしをひの  
尾との物とてをくれ  
お招き来

月十四 行者妓問答

行者法事初高杉り各情地流と逗留の赤部吉原杉葉  
を内捲女瀬川とてしよの所次ふくと人小十念と  
上人瀬川おむきいなるさるる

法事曰

汝を包く人界のまとうけてもく世邊とて君か幸るるや  
瀬川答

釋尊の佛法とて此法は始ひ今の時釈迦と幸るる  
おとほの我とて人の身を賣るる如徳とて人

和尙あきけ

池のうた夜あく月まほれも

さうとあさるる月もかくれ

瀬川返答

谷水とて移く空とてまらるる

つきとてあつるる月もや

法事曰

高野山より北尾重政業

お招き来

又曰

汝先は佛より今の時とて釈迦と幸るる  
おとほの我とて人の身を賣るる如徳とて人

瀬川答

先のうた夜あく月まほれも

さうとあさるる月もかくれ





